

川上宏奨学金報告書

1. 論文タイトル

1970年以降のアメリカナイゼーションの変容

——木滑良久期と木下孝浩期の『POPEYE』を通じて

2. 論文要旨

日本社会におけるアメリカナイゼーションについては、社会学者の吉見俊哉や石川弘義が論じてきた。本論文では、それらのアメリカナイゼーション論を先行研究とし、1970年以後の日本のアメリカナイゼーションを考察することを目的とする。その際、1976年に平凡出版から創刊され、当時の若者にスケートボードやスニーカーなどのアメリカの文化を普及させた雑誌『POPEYE』を対象に考察した。『POPEYE』の先行研究として、岡田章子の「『popeye』におけるアメリカニズムの変容と終焉」と小林真樹の「若者雑誌と1970年代日本における「アメリカナイゼーション」の変容」——『宝島』, 『Made in U.S.A catalog』, 『ポパイ』, 『ブルータス』を事例に」があげられる。しかし、両者とも1980年前後までの『POPEYE』を対象としており、その後の『POPEYE』に関する考察や変遷が十分に検討されていない。本論文は、1980年以後の『POPEYE』の変遷の概略を示すとともに、初代編集長を務めた木滑良久が「本来の軌道に戻った」と述べる2012年5月10日号以後の『POPEYE』を取り上げることで、『POPEYE』の先行研究を補完することも目的とする。

調査の方法として、1号から124号までの木滑が編集長を務めた時期の『POPEYE』と、木滑が「本来の軌道に戻った」と述べる、木下孝浩が新たに編集長に就任しリニューアルされた2012年5月10日号以後の『POPEYE』を取り上げた。その際、両誌における「シティボーイ」と「チープシック」という言葉の使われ方の変化に注目した。また、吉見は、1992年の「シミュラークルの楽園——都市としてのディズニーランド」にて、『POPEYE』を「「街」で人々が何を着、何を観、何を食べるかについての台本」と述べている。吉見の述べるように『POPEYE』は「台本」として受容されていたのか、『POPEYE』が創刊されるまでの過程や作り手の思いを探り、木滑の述べる「本来の軌道」を考察した。

調査結果として、『POPEYE』における「シティボーイ」は、次第に、受け手自身が自由に解釈でき、「チープシック」は、自分に合うことが強調されるよう変化した。また、木滑が述べる『POPEYE』の「「本来の軌道」は、ものを通じて生活やライフスタイルを提案する雑誌のあり方である。

結論として、『POPEYE』によるライフスタイルの提案の仕方は、自分の価値観をもった主体的な受け手がよりつよく想定されるよう変化した。受け手の基準こそがアメリカの基

準以上に重視されるようになり、内向的かつ閉鎖的なより強度の高いアメリカナイゼーションが展開されていることを明らかにした。

3. 奨学金使途

書籍代、交通費、資料のコピーやスキャンなどの費用。

謝辞

本研究を実施するにあたり、奨学金を寄付していただいた故川上宏先生と関係者の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。